

きらり 企業

LD製品の検査装置 軸に

の光源に使われる。検査装置は光の強度や波長の安定具合などをチェックするものだ。

設立3年目の1981年に開発した1号機は、LDの素子をピンセットで検査機に載せて計測するため1個検査するのに2、3分かかった。85年に別のメーカーの依頼で量産用の自動検査装置を製作。200個入りトレーを数段重ねて次々に検査できる装置で、1個当たり3秒に短縮し

DVDの読み取りや光通信の光源として使われる半導体レーザーダイオード(LED)。

創業以来、LD製品の検査装置の品質維持を心掛けてきた。「気付いたら国内メーカーの7割に提供していた」と石塚静社長(71)は感慨深げに語る。

アルファクス (川崎市中原区)

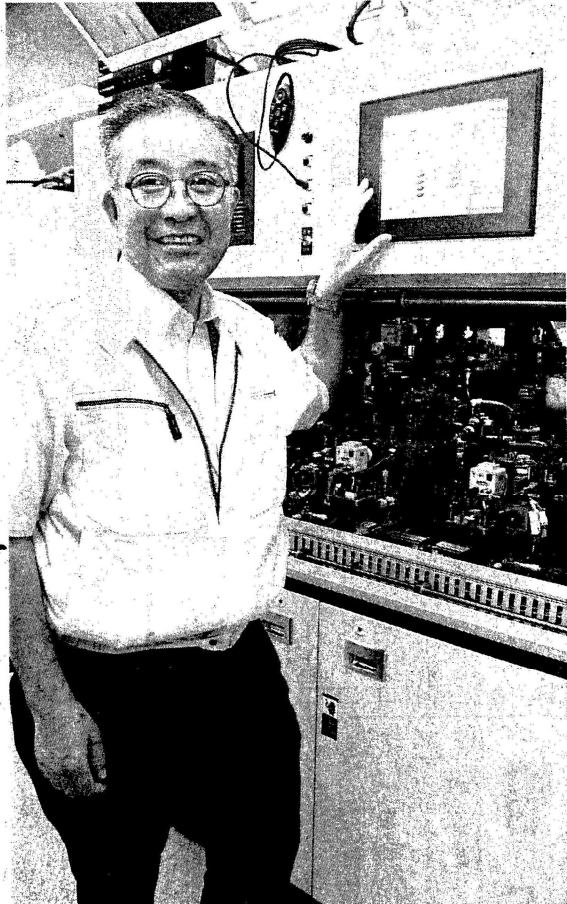
トやアップルなどが登場し、ベンチャー(新興企業)ブーム。電気通信の主役は真空管からトランジスター、さらに集積回路(IC)へと変わり、技術革新が進んでいた。そんな時、社の未来を左右する仕事を知り合いの経営者から舞い込んだ。「大手メーカーから通信用LD製品の検査装置を依頼されたが、うち

ではできないので代わりにやってくれないか」。転機だった。半導体LDは大きく分けると2種類ある。一つはDVDやCDのプレーヤーで光ディスクの情報を読み出すため短波長のもの。もう一つは、動画データなど多くの情報を中継せずに最も遠くへ届かせるため、長い波長を持つ光通信

ツクするものだ。設立3年目の1981年に開発した1号機は、LDの素子をピンセットで検査機に載せて計測するため1個検査するのに2、3分かかった。85年に別のメーカーの依頼で量産用の自動検査装置を製作。200個入りトレーを数段重ねて次々に検査できる装置で、1個当たり3秒に短縮し

た。「ものづくりが楽しくて、興奮しながら取り組んでいた」と振り返る。3000万〜5000万円の検査装置の注文が相次ぎ、社を挙げて休日返上で臨んだ。しかしIT(情報技術)バブル崩壊で、2000年以降、受注は光通信用が5年間ゼロ、光ディスクは半分に減った。リーマン・ショックでさらに落ち込み、従業員を解雇する苦渋を味わった。そうした難局を乗り越え、ここ数年は中国、台湾などでLD製造会社が躍進し、海外からの受注が増えた。東京五輪・パラリンピックに向けた公衆無線LAN「WiFi」の整備などで、国内売り上げも順調だ。

栃木県今市市(現・日光市)出身で農家の8人きょうだいの三男。大学で電気通信工学を専攻し、プリント基板の設計などを経験した後、起業した。「α」(始まり)と「X」(未知数)を組み合わせて「未知へのスタート」の思いを社名に込めた。



海外向けの検査装置の前で開発当時を振り返る石塚社長

1979年2月設立。資本金1500万円。従業員50人。CDやDVDなどの読み取りに用いられる半導体レーザーダイオードの量産用検査装置を国内外に提供している。経済産業省選定の2008年度「元気なモノ作り中小企業300社」に選ばれた。

最近では植物育成用などの発光ダイオード(LED)製品と、農業情報処理システム事業の分野にも進出しているが、「主軸は、社を支えてきた検査装置に変わりはない」と言い切る。(石川祐司)